

## 広島大学文学部所蔵楔形文字粘土板文書の予備調査

山口大学                      同志社大学                      広島大学  
山本 孟                      森 若葉                      上野 貴史

### 1. 広島大学文学部所蔵楔形文字粘土板文書

広島大学文学部には379点の楔形文字粘土板文書が所蔵されており、その管理を長年言語学研究室が行っている。この度、縁あって、この粘土板文書の調査を山本孟氏と森若葉氏に広島大学表現技術プロジェクト研究センターの特別研究員として調査に入ってもらった。両先生にこの調査を行って頂くに当たり、まず最初に、言語学研究室を代表して上野が楔形文字粘土板文書の入手経緯について分かる範囲で報告してみることにする。

この379点にも及ぶ楔形文字粘土板文書のすべては、言語学教室の吉川守名誉教授（1931-2009）が収集されたものである。この広島大学文学部に所蔵されている吉川守先生による楔形文字粘土板文書の収集は1980年から始まる。この時に入手された楔形文字粘土板文書は296点にもものぼるが、まず、その入手の経緯を当時の新聞記事から紹介してみたい<sup>1)</sup>。

「今年（1980年）5月、英国バーミンガム大のランバート教授から吉川教授に「ロンドンの古物市場で売りに出されている。未公開の貴重な資料だと思う」との情報」（1980年10月22日、毎日新聞）が入る。吉川守先生は、「同大（広島大学）図書館に購入を勧めた。しかし、図書館は買いつける予算がなく困っていたが、事情を知った日本オリエント学会維持会員で（中略）岩崎病院の岩崎旺太郎院長<sup>(六五)</sup>が、『学術研究のためなら』と二千万円を図書館に寄付した」（1980年10月1日、中国新聞）。そして、広島大学図書館がこの「開業医の資金援助を得て、（中略）ロンドンの古物商から買いつけた」（1980年10月1日、中国新聞）のがこの296点もの楔形文字粘土板文書である。この当時、「日本に現存するタブレットは、京大に五十四個<sup>2)</sup>、東大に五、六個、天理大に五個、岡山市立オリエント美術館に一個。個人所蔵を含めてもせいぜい百個」（1980年10月1日、中国新聞）であったことから、この296点もの大量購入は次元を越えたレベルであったことは容易に想像できる。

続いて、新聞記事を賑わすのは、縦二十センチ、横二〇・七センチ、厚さ四センチの超大型粘土板文書である。この楔形文字粘土板文書は、「現在のイラク南部の古代都市遺跡（ウンマの遺跡）

<sup>1)</sup> 当時の新聞記事の資料は、峯正志先生（金沢大学名誉教授）から提供して頂いた。

<sup>2)</sup> 現在、京都大学総合博物館には60点の粘土板が所蔵されており、この調査報告は、『楔形文字粘土板』（森若葉・山本孟・村上由美子（2022）, 京都大学総合博物館所蔵資料目録第9号）に記録されている。

からの出土品で、『シュルギ王の治世四十六年一月作成』の記述から紀元前二〇一〇年ごろのもの」（1982年9月30日、中国新聞）である。この楔形文字粘土板文書についても、「購入資金六百四十万円は、（中略）岩崎病院の岩崎旺太郎院長（<sup>六七</sup>）が『学術研究のため役立ちたい』と寄付した」（1982年9月30日、中国新聞）資金により入手したものである。この楔形文字粘土板文書は、「これまで知られていない都市の名前も出ており、言語学ばかりでなく、歴史学的にも貴重な資料という」（1982年9月30日、読売新聞）。

以上の新聞記事に掲載された楔形文字粘土板文書以外にも、言語学研究室が管理している楔形文字粘土板文書があるが、その数は総計379点にも及ぶ。これらの楔形文字粘土板文書を資産記録に基づいて一覧にしたものが<表1>である。

<表1：広島大学文学部所蔵楔形文字粘土板文書>

入手日	粘土板文書	時代	出土地	点数
1980/10/17	シュメール語粘土板文書	ウル第三王朝時代		296点
1981/08/14	シュメール語粘土板文書	ウル第三王朝時代		6点
1981/11/02	粘土板文書		シリア出土外	5点
1982/04/05	シュメール語粘土板文書 (小型粘土板)	紀元前2065年頃		5点
1982/08/30	シュメール語粘土板文書 (焼粘土) [20.4×20cm]	紀元前2049年頃		1点
1982/09/16	シュメール語粘土板文書 (物品の受領証) [4.7×3.4cm]	紀元前2064年頃		1点
1982/09/16	シュメール語粘土板文書 (大麦粉支出の記録) [4.0×3.6cm]		ウンマ出土	1点
1982/09/16	シュメール語粘土板文書 (土地の行政的記録) [3.0×3.0cm]			1点
1982/09/16	シュメール語粘土板文書 (物品分配の記録) [2.3×2.1cm]			1点
1982/09/16	シュメール語粘土板文書 (労働の記録)	シュルギ王43年	ウンマ出土	
1983/04/30	アッカド語楔形文字粘土板文書		メスケネ出土	8点
1983/04/22	シュメール語粘土板文書 (7399)			1点
1983/04/22	シュメール語粘土板文書 (8099)			1点
1983/04/22	アッカド語粘土板 (9547) (バビロニア)			1点
1984/09/27	シュメール語粘土板文書 (受取の記録)		ドレヘム出土	
1985/05/31	シュメール語粘土板文書			25点
1986/06/12	シュメール語粘土板文書			16点
1986/11/14	シュメール語粘土板記録と その粘土板封筒			2点
1989/01/19	シュメール語粘土板文書			
1989/05/09	シュメール語粘土板文書			

この度、この楔形文字粘土板文書についての調査を山口大学の山本孟氏と同志社大学の森若葉氏にお願いすることになった。このような調査は、長年、言語学研究室でひっそりと眠っていた楔形文字粘土板文書に再び日の目を見ることとなる良い機会になると思われる。今後の調査の進展に大いに期待するところである。

(上野 貴史)

## 2. 楔形文字粘土板文書の作成年代と言語、これまでの出版状況について

広島大学文学部と言語学研究室の許可を得て、2023年5月から、楔形文字粘土板文書についての予備調査を実施してきた<sup>3)</sup>。以下、山本と森がこれまでの予備調査内容とその結果を報告する。具体的には、所蔵粘土板文書について、これまでに出版されたものかどうかの確認と、粘土板に記されている言語の判別、それぞれの粘土板に記されている内容の大まかな把握、そして数点についてはハンドコピーと翻字を行ってきた。

所蔵されている粘土板文書に記された楔形文字の言語は、シュメール語・アッカド語・ウガリト語である。379点中、362点がシュメール語、14点がアッカド語、1点がウガリト語であり、また言語が不明なものが2点ある。シュメール語粘土板のほとんどはウル第3王朝時代の行政経済文書である。アッカド語で記された粘土板文書についても、その多くが行政経済文書に含まれる文書である。また、アッカド語文書の約半数はシリア出土の粘土板であり、ウガリト語の粘土板文書もシリアのラス・シャムラ出土のものであると考えられる。

所蔵粘土板のなかには、これまでにすでに出版されているものもある。シュメール語粘土板3点については、広島大学文学部の吉川守教授によって1984年と1985年に出版されている。ウル第3王朝時代シュメールの行政経済文書である UHI 278と279は、大阪の国立民族学博物館所蔵の粘土板 NME 94674と94698とともに、Yoshikawa (1984) に出版されている。翌年の Yoshikawa (1985) では、ウル第3王朝時代の行政経済文書 UHI 14 (本文では UHI 14と記載されるが、現在の登録番号は UHI 366) のハンドコピーと写真が出版されている。この粘土板は、Keiser (1919) によって出版されたイエール大学所蔵の粘土板の No.67、および Scheil (1927) で出版されている粘土板のうちの No.8c と同内容の文書であるとして紹介されている。また、同じくウル第3王朝時代の粘土板で、封筒とその中の粘土板の二点からなる UHI 377については、吉川・峯 (2001: 500-501) にて、写真とそれぞれのハンドコピー、翻字、翻訳が出版されている (粘土板は377a、封筒は377bと表記される)。加えて、アッカド語の粘土板についても、Tsukimoto (1988) が、シリア出土文書として7点の粘土板文書

<sup>3)</sup> 本研究は、JSPS 科研費・若手研究21K12848 (研究代表者・山本 孟)と、基盤研究 (C) 20K00588 (研究代表者・森若葉)、ならびに山口大学基金「若手研究者による研究プロジェクトに対する支援事業」(研究代表者・山本 孟)の助成を受けたものです。

UHI 307・370・371・372・373・375・376の翻字・ドイツ語翻訳を、写真・ハンドコピーとともに出版している。

(山本 孟)

### 3. 楔形文字粘土板文書の概要と特徴について

シュメール語文書の大部分は、ウル第3王朝期の行政経済文書であることが確認できているが、所蔵点数が多いため、詳細については現在調査中である。これらの内容には、一部は表1で示されているように、穀物や家畜の支出や受け取りや、ビールや食料品などの記録、葦の管理、労働力計算などが確認できる（一例として4.1を参照されたい）。

アッカド語文書については、上記のように7点がTsukimono (1988) で出版されているが、そこには収録されていないUHI 369も、それらシリア出土文書と類似した契約にかんする粘土板文書の断片と考えられ、裏面に記載される証人の中にはシリア出土文書に現れる人物と同名の人物が確認される。同様に、契約にかかわる文書と思われるUHI 312は、古バビロニア時代に作成されたものと考えられる。UHI 305については、裁判記録の断片と思われるが、上に挙げたものとは形状・字体が異なるため、時代や出土地が異なると考えられる。さらに、横長の形状のUHI 314とUHI 320も行政経済文書と考えられる。他にも、シュメール語・アッカド語彙リストと思われるUHI 367や、新バビロニアの王ネブカドネザルの王碑文UHI 379などもある（4.2を参照されたい）。なお、UHI 379は粘土板ではなく、レンガに刻まれた碑文である。

その他、粘土板の形状は、完形のものも多くが四角形をしており、正方形に近いものから、縦長のものや横長のものもある。ただし、丸状のものはない。また、UHI 305や367など、かなり断片的なものもある。粘土板の大きさは、最小のUHI 329で1.9×1.7×0.7cmから、表1の中で1982/08/30入手とされている最大のUHI 378のように、縦横20cm以上、厚さも4cmにおよぶ、通常の粘土板と比べても非常に大きなものもある。粘土板文書の中には、印影が残るものも複数確認される。多数の粘土板文書とは異なった、特徴的な形状の文書としては、封筒入の粘土板文書が数点ある。上に挙げたシュメール語粘土板UHI 377は封筒とその中身が別々の状態で残されている他、アッカド語の粘土板UHI 312については中の文書が封筒に入ったまま状態で残されている。

(山本 孟)

#### 4. 楔形文字粘土板文書の例

ここでは楔形文字粘土板文書の例として、シュメール語とアッカド語で記されたものを一点ずつ紹介する。

##### 4.1 UHI 16 シュメール語行政経済文書

作成地：プズリシュ・ダガン

時期：ウル第3王朝期アマルスエン治世5年第3月2日

サイズ：4.2×3.2×1.5cm

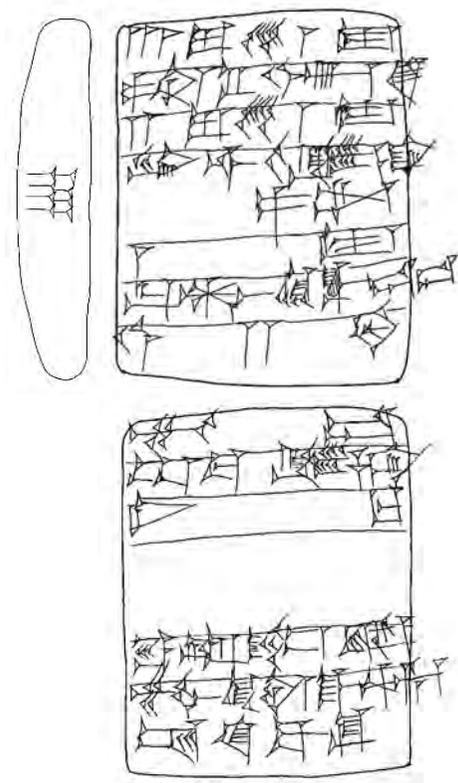
表面

1. 3 udu-niga 1 sila<sub>4</sub>
2. ensi<sub>2</sub>-Adab<sup>ki</sup>
3. 2 udu-niga 1 sila<sub>4</sub>
4. Lu<sub>2</sub>-bala-sa<sub>6</sub>-ga /šabra
5. 1 sila<sub>4</sub>
6. Ur-<sup>d</sup>En-gal-DU-DU
7. ud-2-kam

裏面

1. mu-DU
2. Ab-ba-sa<sub>6</sub>-ga
3. i-dab<sub>5</sub>
- [空白部]
4. iti u<sub>5</sub>-bi<sub>2</sub>-gu<sub>7</sub>
5. mu en unu<sub>2</sub>!(TE)-gal-<sup>d</sup>Inana/ Unug<sup>ki</sup> ba-huĝ

左端 8



<表面>

- 1) 3匹の穀物肥育のヒツジと1匹の仔ヒツジは、2) アダブの知事（から）。3) 2匹の穀物肥育のヒツジと1匹の仔ヒツジは、4) 耕地管理責任者のル・バラサガ（から）。5) 1匹の仔ヒツジは、6) ウル・エンガルドゥドゥ（から）。7) 第2日目。

<裏面>

- 1) 引き渡し。2) アバサガが、3) 引き受けた。4) ウビ鳥を食べる月 [=第3月]。5) エン・ウヌガル（・アナ）がウルクのイナンナ神のエン神官に任命された年 [=アマルスエン治世5年]。

<左端>（合計）8。

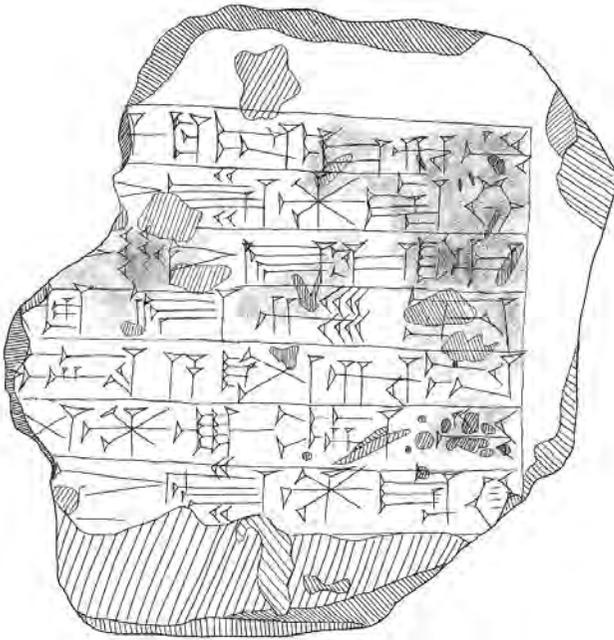
## 4.2 UHI 379 アッカド語レンガ碑文

作成地：バビロン

時 期：新バビロニア王国ネブカドネザル 2 世

サイズ：18.0×17.1×5.5cm

- |  |                        |
|--|------------------------|
| 1. [ḥ <sup>d</sup> ] <sub>a3</sub> -ku-du-ur <sub>2</sub> -ri-uri <sub>3</sub> | ネブカドネザル（2世）、           |
| 2. [lug] <sub>al</sub> babil <sub>a2</sub> <sup>ki</sup>                       | バビロンの王、                |
| 3. [za-n] <sub>i</sub> -in e <sub>2</sub> -sag-il <sub>2</sub>                 | 3-4) エサギラ神殿とエジダ神殿の扶養者、 |
| 4. u <sub>3</sub> e <sub>2</sub> -zi-da  |                        |
| 5. [ib] <sub>i</sub> la a-ša-re-du   | 5-7) バビロンの王である         |
| 6. [š] <sub>a</sub> <sup>d</sup> na <sub>3</sub> -ibila-uri <sub>3</sub>       | ナボポラッサルの筆頭の跡継ぎ         |
| 7. [lu] <sub>gal</sub> babil <sub>a2</sub> <sup>ki</sup>                       |                        |



**UHI 16** シュメール語行政経済文書粘土板

作成地：プズリシュ・ダガン

時 期：ウル第3王朝期アマルスエン治世5年第3月2日

言 語：シュメール語

サイズ：4.2×3.2×1.5cm



**UHI 379 アッカド語王碑文**

作成地：バビロン

時 期：新バビロニア王国ネブカドネザル2世

言 語：アッカド語

サイズ：18.0×17.1×5.5cm



(森 若葉)

**5. おわりに**

広島大学文学部に所蔵されている楔形文字粘土板文書は300点以上にのぼり、全文書について詳細に内容が理解できているわけではないため、今後も引き続き調査を進めていきたい。次年度以降、調査結果の進捗を報告しながら、各文書について、前章で示したような粘土板文書のハンドコピー・翻字・翻訳をした上で、内容の考察を加えて順次出版する予定にしている。最後に、貴重な所蔵資料の調査を許可してくださった広島大学文学部に感謝申し上げます。特に、粘土板の保管・管理を行なわれている言語学研究室の上野貴史先生、尾園絢一先生には調査にあたり、大変お世話になりました。ここに心から感謝申し上げます。また、

粘土板が広島大学に所蔵された経緯がわかる、当時の新聞記事をご提供いただきました金沢大学名誉教授の峯正志先生に感謝いたします。

(山本 孟・森 若葉)

### 参考文献

- 森若葉・山本孟・村上由美子（2022）『京都大学総合博物館収蔵資料目録 第9号 楔形文字粘土板』、京都大学総合博物館。
- 吉川守・峯正志（2001）「シュメール文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』、494-502、三省堂。
- Keiser, Clarence, E. (1919) *Selected Temple Documents of the Ur Dynasty. Yale Oriental Series, Babylonian Texts, vol. 4*, Yale University Press.
- Scheil Par V. (1927) "Tablettes anciennes (Carptim)," *Revue d'Assyriologie et d'archéologie orientale* 24 (1), 31-48.
- Tsukimoto, Akio (1988) "Sieben spätbronzezeitliche Urkunden aus Syrien," *Acta Sumerologica* 10, 153-169.
- Yoshikawa, Mamoru (1984) "Four Sumerian Letter-Orders in Japanese Collections," *Acta Sumerologica* 6, 121-126.
- (1985) "A New Duplicate of YOS IV, No.67 // V. Scheil, RA 24/1, No.8c," *Acta Sumerologica* 7, 191-193.